

観光戦略としてのキリシタン

—宗教とツーリズムの相克—

松 井 圭 介

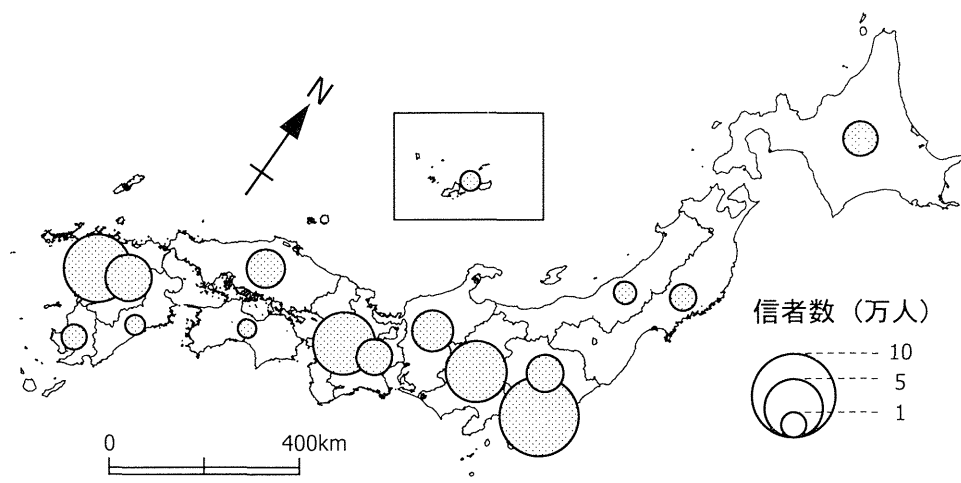
- | | |
|--------------------|---------------------------------------|
| I はじめに | III-3 歴史と文化を観光に：ながさき歴史発見・
発信プロジェクト |
| II 長崎県におけるカトリック信仰 | IV 商品化されるキリシタン |
| II-1 カトリックの歴史と分布 | IV-1 ローカル化する観光都市・平戸 |
| II-2 教会堂建築の特徴 | IV-2 新たな観光資源の創出：平戸キリシタン
紀行 |
| III ホスト側の観光戦略 | V キリシタンツアーの与えるもの—おわりにかえて |
| III-1 九州観光の課題 | |
| III-2 低迷する長崎県の観光動態 | |

キーワード：キリシタン，聖地観光，観光戦略，長崎県，ポリティクス

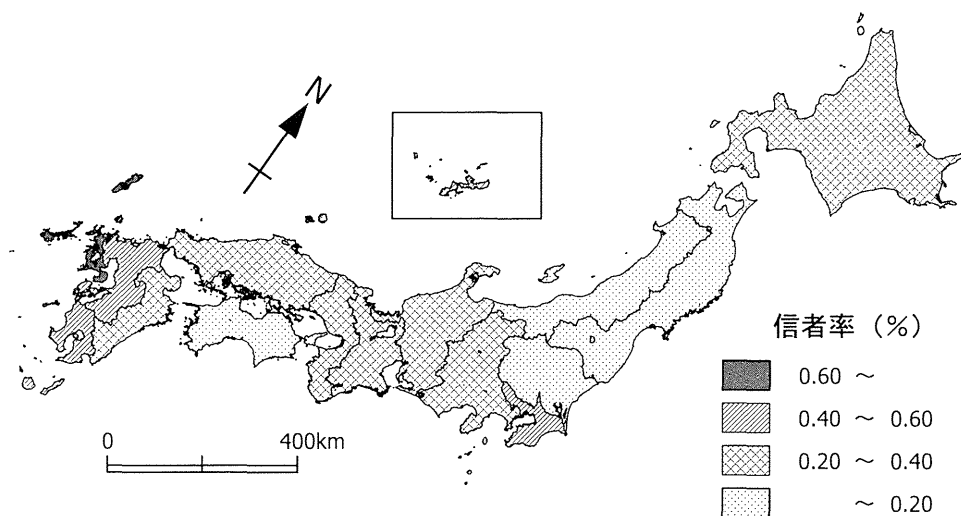
I はじめに

現代は聖地創造の時代である。我々の身の回りにはおびただしい数の聖地が存在している。現代の聖地はもはや、神社仏閣や山岳の霊地といった宗教空間に限定される言葉ではない。音楽でもスポーツでも趣味の世界でもいい。人間に対して何らかの特別な意味をもった場所、特にそこが起源地であったり、非常に由緒のある場所、よく知られている場所、ナンバーワンの場所、カリスマが降りた場所など理由は多種多様であるが、共通点として何か人を惹きつける魅力を持った場所を総称して聖地と呼ぶことが、一般化しているといえるだろう（松井，2004）。日本のスポーツ界を例にとれば、競技ごとに聖地が存在するといっても過言ではない。高校野球の聖地：甲子園，ラグビーの聖地：秩父宮，サッカーの聖地：国立競技場その他，世代や関心によって意見は分かれるかもしれないが，聖地という言葉は，日常生活のなかでマスメディアが安直に繰り返し使用されるようになり，その結果として非聖化が進み，皮肉なことに特別な場所ではなくなりつつあるともいえる。

聖地がもてはやされる理由は社会の動静と密接にかかわっている。21世紀の現代日本社会を例にとれば，バブル経済崩壊後の長らく続いた景気低迷の時代に，世界標準のグローバリゼーションが進行し，旧来の会社文化の価値観が大きく揺らいでしまった。勤労と儉約を美德とし生涯雇用を守られてきた人間は旧人類と蔑視される。一億総中流の幻想が崩れ，勝ち組と負け組がはっきりする格差社会の到来は強度なストレスを人間に与える社会である。伝統的な価値観が崩れ，ストレスに悩まされる現代社会のなかで，人は無意識に自分を支えてくれる場所，自分自身を取り戻すことができる場所を探し求めている。現代が聖地創造の時代であるのは，それだけ不安定な時代であることの証左であり，さまざまな種類の聖地が流行することは，それだけ人の価値観も多様化し，自分流の生き方が模



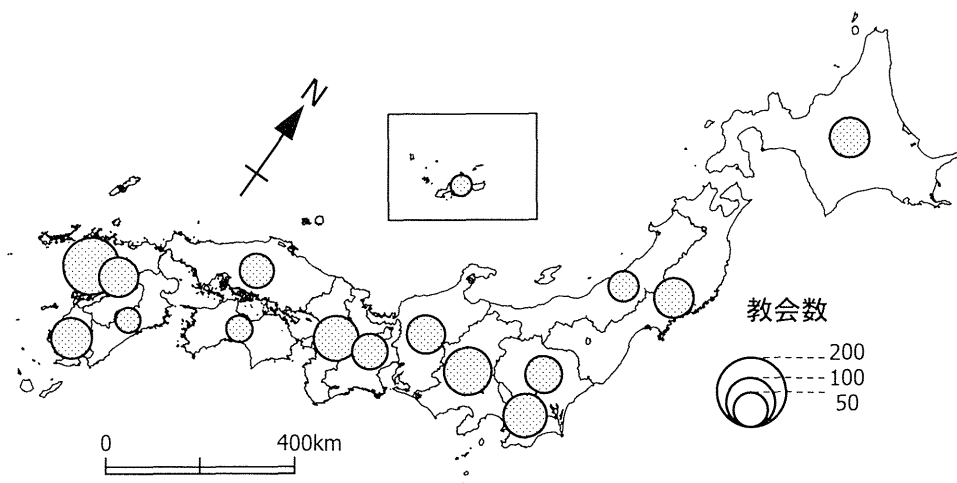
第1図 教区別にみたカトリックの信者数（2004年）
（カトリック中央協議会資料より作成）



第2図 教区別にみたカトリックの信者率（2004年）
（カトリック中央協議会資料より作成）

5万4千人の順となっている。東京、大阪、横浜といった大都市を含む人口稠密地区で信者数が多いのは当然ともいえるが、その中で長崎教区の信者数の多さは特筆される。このことは信者率（第2図）をみると瞭然としており、長崎教区では人口の4.43%がカトリックの信者であるのに対し、東京教区では0.51%、大阪教区と横浜教区では各0.36%と0.35%にとどまっている。カトリック信者率の全国平均が0.36%であることを考えると、長崎教区がいかにカトリック信者を多く抱える地域であるかがわかる。長崎教区の他にも鹿児島教区（0.54%）や那覇教区（0.43%）、福岡教区（0.41%）など大分教区を除く九州各地域でカトリックの信者率が相対的に高く、この地域が日本の他の地域と比較して、カトリックの信仰を受容した地域であることがいえる。

こうした信者率の高さを反映して、教会数でも長崎教区が最多（135）である（第3図）³⁾。以下、



第3図 教区別にみたカトリックの教会数（2004年）
（カトリック中央協議会資料より作成）

横浜教区の99，大阪教区89，東京教区81の順となっている．長崎教区の場合，小教区数（70）に比して，規模の小さい巡回教会（63）が多いことに特徴がある．徳川幕府によるキリスト教禁制が解け，それまでの潜伏キリシタン時代を耐えてきた信者たちが，居住地である人口規模の小さい農山村の集落に教会を建立していったことがその理由である．

第1表は，長崎を中心としたキリスト教教会史を整理したものである⁴⁾．1559年，鹿児島・種子島において聖フランシスコ・ザビエルにより伝来されたキリスト教は，翌1560年にザビエルが平戸に上陸して，本格的な日本布教が開始された．松浦党の有力家臣であった籠手田氏により日本最初の教会が平戸に建てられると，1560年代には南蛮貿易港であった横瀬浦（西彼杵半島）島原，口之津（島原半島）と布教が進み，1562年には大村藩領主・大村純忠が横瀬浦の教会で洗礼を受け，日本初のキリシタン大名となった．1565年には五島での布教が2人のイルマン（伝道士）によって始められ，福江と奥浦に教会が生まれた．その後1567年には，五島布教のイルマンの一人であるアルメイダが長崎に入り，大村純忠の家臣より土地と寺を寄進されて布教が始まった．1569年には長崎で初めての教会（トードス・オス・サントス）が完成した．

このようにザビエルの平戸布教から約20年で，長崎の各地で布教が進み，教会の建立がみられるようになった．1571年，大村純忠は長崎の港を貿易港として開港すると，港の突端部（現長崎県庁所在地）に「被昇天の聖母の教会」を建てた．この教会は次第に信徒を増やし，やがて日本の教会の中心となるまで発展を遂げた．1580年には，大村純忠は内町と茂木の地をイエズス会に寄進し，長崎はキリシタンの町として繁栄していった．1584年，同じくキリシタン大名となった有馬晴信が浦上の地をイエズス会に寄進すると，さらにキリシタンは増加した．伊藤マンショ，千々和ミゲル，原マルチノ，中浦ジュリアンら天正遣欧少年使節がローマ教皇グレゴリオ13世に謁見したのもこの時期である（1585年）．これに先立つ1576年には，京都に木造3階建ての南蛮寺（教会堂）が建立されるなど，国内各地で南蛮寺やコレジオ（宣教師の養成学校），セミナリオ（神学校）が宣教師によつ

第1表 長崎における教会の歴史

	年代	出 来 事
キリシタン時代	1549年	フランシスコ・ザビエルにより、日本にキリスト教伝来
	1550年	ザビエルが平戸に上陸
	1560年代	横瀬浦、島原、五島、長崎各地で布教が進む
	1571年	長崎開港
	1576年	木造3階建ての南蛮寺が京都において建立
	1582年	天正遣欧少年使節の派遣（1590年に帰国）
	1587年	秀吉の禁教令により京阪地方の教会堂が破壊される
	1597年	長崎において宣教師・信徒26人が殉教（1862年に列聖）
	1614年	江戸幕府の禁教令
	1637年	島原の乱
1644年	マンショ小西神父が殉教（神父が不在になる）	
潜伏時代	1653年	極東などへの宣教を目的としたパリ外国宣教会が設立
	1797年	外海より五島への移住はじまる（約3000人が移住）
	1859年	安政条約により長崎開港
	1864年	フレ神父、プチジャン神父らによって大浦教会完成
	1865年	プチジャン神父が大浦教会で250年の弾圧を経た信徒発見
	1867年	浦上四番崩れはじまる（信徒が3384人配流）
	1868年	キリシタン教禁制の高札、ド・ロ神父来崎
1873年	キリスト教禁制の高札撤廃	
復活時代	1882年	ド・ロ神父により出津協会完成
	1888年	カトリック長崎司教区成立
	1889年	明治憲法で信教の自由を宣言
	1893年	ド・ロ神父により大野教会完成
	1902年	マルマン神父により黒島教会完成
	1910年	青砂ヶ浦教会完成
	1915年	旧浦上教会完成
	1919年	石造の頭ヶ島教会完成
	1959年	長崎大司教区に昇格
1981年	ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世来崎	

(長崎の教会群を世界遺産にする会の資料より作成)

て作られていった。その結果キリシタンの信仰は急速に普及し、1582年の頃には、肥前、肥後、豊後などで11万5千人、豊後で1万人、畿内などで2万5千人に達したといわれている。

キリシタンの隆盛は、時の権力者である織田信長による宗教政策によるところが大きい。多年にわたる一向一揆との戦いは、1580年の石山本願寺攻めの成功により信長側の勝利に帰するが、本能寺の変により信長が没すると（1582年）、跡をついだ豊臣秀吉は、次第にキリシタンに対して統制を厳しくすることとなる。キリシタン大名であった高山右近の領地を没収した秀吉は、1587年バテレン追放令を出し、宣教師の国外退去を命じた。一方で南蛮貿易の利益を重視し、豪商らの東南アジア諸国への渡航を奨励したため、キリシタンの取締りには実効性が乏しく、宣教師の取締りも不徹底であった。しかしサン＝フェリペ号事件を契機とし、スペイン系宣教師および信徒の26人を長崎・西坂の地で処刑するなど、キリシタンを取り巻く信仰状況は次第に厳しいものとなっていった（写真1）。1598年に秀吉が没すると、江戸幕府による直轄領への禁教令（1612年）が出されるまでの十数年間は、長崎における教会の黄金時代となった。この間に7人の日本人司祭が叙階し、現長崎市内には次々と教会が設立された。この時代は長崎の町には数多くの教会が林立した時代であり、長崎の宗

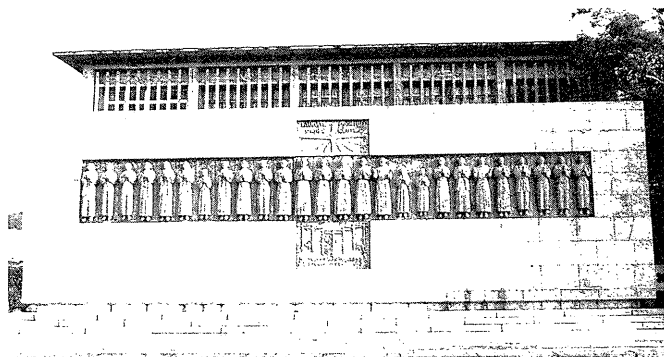


写真1 西坂殉教地に建立された二十六聖人記念碑（2006年1月撮影）

1597年2月5日、京都から連れられた26人のキリシタンが処刑されたのを皮切りに、多くのキリシタンがこの地で殉教した。

教文化の中心となっていた。

1614年、宣教師や高山右近らを海外追放処分とする禁教令が発せられると、全国の宣教師らは長崎に集められ、やがてマニラやマカオなど海外へと追放された。長崎でも教会の取り壊しが始まり、有馬、口之津では多数の殉教者が出た。その後長崎でも数度にわたり信徒らによる殉教があった。オランダとの貿易競争に敗れたイギリスは1623年、平戸の商館を閉鎖し日本との交易から撤退すると、翌1624年、スペイン船の来航が禁止された。幕府は1633年に老中奉書を携えた奉書船以外の海外渡航を禁じると、1635年には日本人の海外渡航を全面禁止したうえで、すでに渡航していた在外日本人の帰国も禁止した。1637～8年に起こった島原の乱の影響を受けてキリシタン禁教は徹底され、1639年にポルトガル船の来航禁止、1641年に平戸にあったオランダ商館を長崎・出島に移し、貿易と禁教を幕府の権力において掌握することとなった。その後、約250年にわたり潜伏の時代となる。

潜伏した信徒たちは、西彼杵、浦上、五島、平戸などに逃れて信仰を守り続けたが、その間にも何度も厳しいキリシタン弾圧が繰り返された。1864年に安政の条約により長崎が再び開港されると、外国人居留地である大浦に天主堂が建設されたが、その後も浦上四番崩れと呼ばれる信者の配流などの弾圧は続いていた。キリスト教禁制の高札が廃されたのは、1873年になってのことである。晴れてキリスト教が公認されると、潜伏キリシタンと呼ばれた信者たちは、明治中期から大正期にかけて、五島や平戸、外海などの各地で教会を建立し、信仰の復活を喜んだ。一方で長い潜伏時代の間、カトリック信仰は在地の仏教や神道と習合し、マリア観音やオラシヨ⁵⁾といった独自の信仰形態を生みだした(写真2,3)。そのため、公認後もカトリックに復帰することなく独自の信仰を堅持した人々たちもあり、カクレキリシタンと呼ばれた。

第4図は長崎県における現代のカトリック教会分布を示したものである。長崎市内のほか、外海^{そとめ}地方、平戸島、五島列島を中心に沿岸部の集落に教会が分布していることがわかる。これらの教会の多くは、弾圧をのがれ、これらの地方に移住していった潜伏キリシタンがキリスト教の解禁後に集落に教会を設立し、信仰の証として受け継いできたものである。



写真2 サン・ジワン枯松神社（2006年2月撮影）
外海地区（現長崎市外海）にあるキリシタン神社。日本人伝道師であったサン・ジワン神父を祀る。潜伏時代、この神社で潜伏キリシタンたちがオラショを唱えるとともに、伝承してきた。

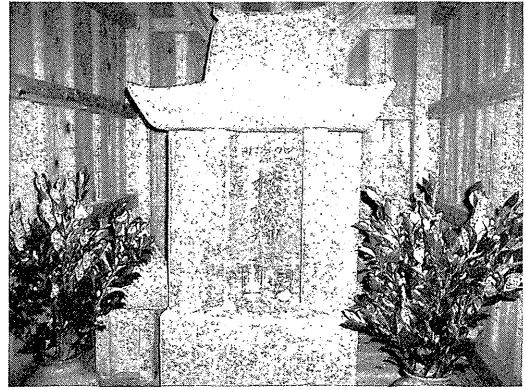
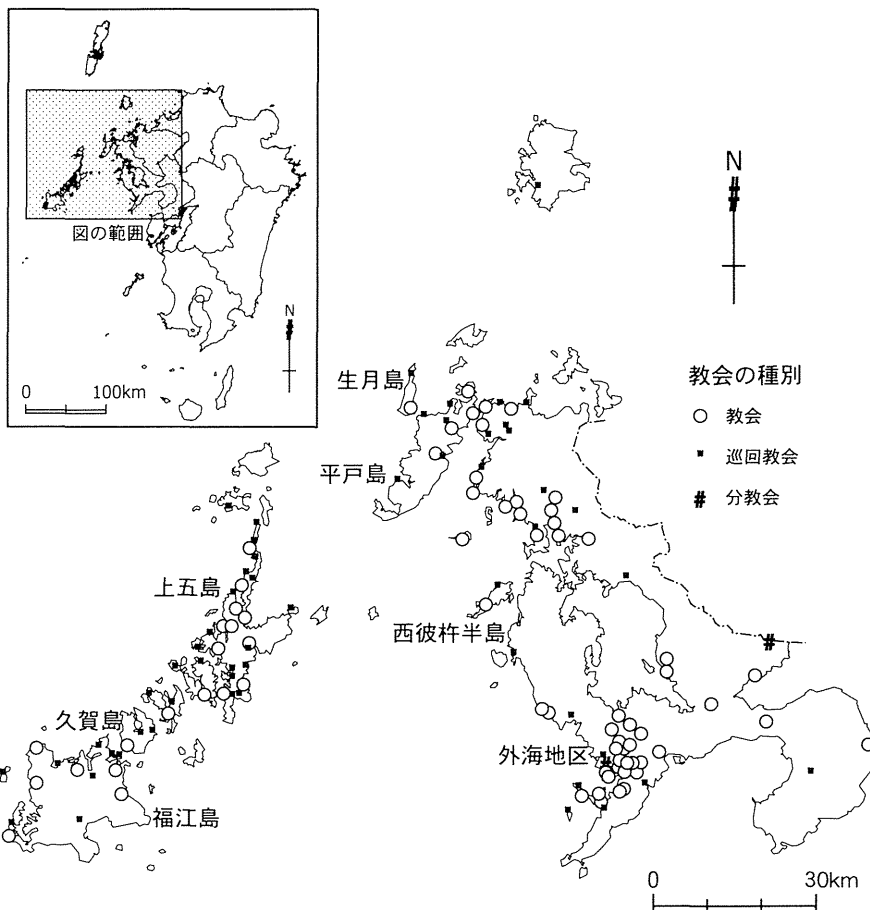


写真3 枯松神社・本殿内の石塔（2006年2月撮影）
キリシタン神社のしるしとして、サン・ジワンの文字が見える。



第4図 長崎県におけるカトリック教会の分布（2004年）
（カトリック中央協議会資料より作成）

II-2 教会堂建築の特徴

長崎県の教会堂建築物は、わが国の近代建築史においても重要な意義をもつものも多く、なかでも現存する日本最古の教会堂である大浦天主堂（国宝）（写真4）はよく知られているが、この他にも黒島教会（佐世保市黒島，写真5）は国宝、^{たじら}田平教会（平戸市，写真6）^{あおさがうら}青砂ヶ浦教会、^{かしらがしま}頭ヶ島教会（共に新上五島町，写真7，8，9），^{こりん}旧五輪教会（五島市，写真10，11）が国指定重要文化財となっている。わが国の教会建築物のなかで国指定の重要文化財になっているのは、函館ハリストス教会堂（北海道）や鶴岡カトリック教会天主堂（山形県）やニコライ堂（東京都）などわずかに過ぎず、長崎県に現存する教会堂建築物の建築史的な意義がうかがえる。九州大学工学部の建築学教室を中心に、長崎県の教会堂建築物の悉皆調査が実施され、その成果は長崎県教育委員会編（1977）として公刊されているが、本節ではその基本的な特徴に関して概括しておきたい。

1) 教会堂建築の時代区分と建築様式⁶⁾

第5図は、建築材料の形態別にみた教会建設設立棟数の推移を5年単位で示したものである。1975年以前に建設された教会堂建築211棟（遺構も含む）のうち、木造が163棟と全体の4分の3強を占めており、以下RC造29棟，煉瓦造17棟，石造2棟となっている。

木造教会堂は各時期に平均して建設されているが、禁教令が廃止された1873（明治6）年から約10年を経過した1881～5年と、第2次世界大戦後の1946年以降に数多く建設されていることがわかる。禁教令撤廃後、信者は教会堂の建設を許されることになるが、教会堂の建設には多額の費用を必要とするうえに、その資金の大部分は信者自身の拠出金によって賄われていたため、信者は教会堂建設のための費用積立を行っていた。禁教令撤廃から教会堂設立までに10年の時間差がみられるのは、こうした理由によると考えられる。旧五輪教会（写真10，11）のような優れた建築物もあるものの、こうした木造の教会堂の多くは民家を改修，改築した小規模のものである。



写真4 大浦天主堂（2006年2月撮影）

1864年に竣工し、1879年に改築された大浦天主堂は現存する日本最古の教会堂として1933年に国宝指定を受けた。原爆の被害を受けたが1951年に修復され、1953年に再び国宝指定を受けた。



写真5 黒島教会（2006年2月撮影）

黒島は九十九島の中で最大の島であり、外海、五島、生月などから多くのキリシタンが移住し潜伏していた。フランス人のマルマン神父の設計・指導と信徒の献金および労働奉仕により1902年に完成した。完成された3層構造をもち、大浦天主堂に次いで国宝に指定された。

煉瓦造の教会堂は17棟すべてが1920年以前の建設である。大浦天主堂だけが江戸時代末期の1864年に建てられたが、他の16棟は1881年以降に建設された。特に1906年から1920年の時期に全体の半数以上の煉瓦造教会堂が設立をみている。1920年を最後に1棟も煉瓦造の教会堂が建設されていないのは、1923年に起こった関東大震災で煉瓦造建築の地震に対する脆弱さが明白となったからであると推測される（川上ほか、1985a：113）。先述した国指定文化財の黒島教会や田平教会をはじめ、文化財的な価値を有する建造物が多く、教会堂建築は煉瓦造において一つの完成をみたといわれている（川上ほか、1985a：113）。

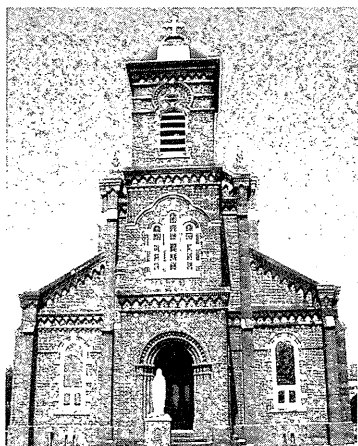


写真6 田平教会（2005年7月撮影）
鉄川与助が設計した最後の煉瓦造教会。張り出した特徴的な3層の塔屋をもつ。2003年に国指定の重要文化財指定を受けた。



写真7 青砂ヶ浦教会（2004年8月撮影）
旧野首教会に次ぐ鉄川与助2作目の煉瓦造教会。信徒たちは海岸から小高い教会建設地まで煉瓦を背負って労働奉仕をして教会の礎を作った。2001年から国指定重要文化財。



写真8 頭ヶ島教会の前景（2004年8月撮影）
幕末まで無人島であった頭ヶ島には迫害を逃れて鯛ノ浦のキリシタンが移住した。信徒たちは対岸の山から石を切り出し積み上げた。2001年から国指定重要文化財。



写真9 頭ヶ島教会の横景（2004年8月撮影）
石積みにステンドグラスと赤瓦を配した教会堂の美しさから観光客の人気も高い。

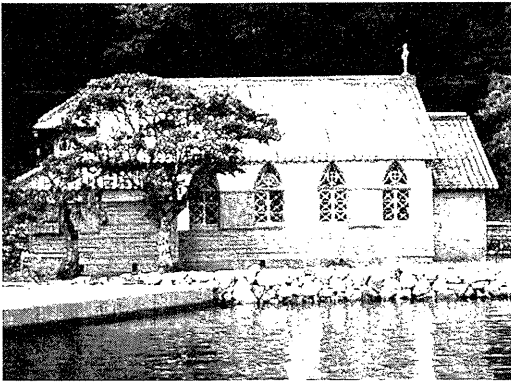


写真10 旧五輪教会 (2004年8月撮影)
久賀島にある五島最古の教会。1931年に浜脇教会(写真11)の改築の際、それまで使用されていた旧聖堂を解体・移築したものである。1985年に県指定有形文化財の指定を受け、ついで1999年国指定重要文化財に指定された。

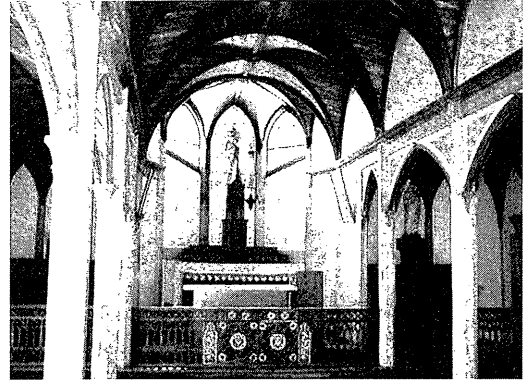
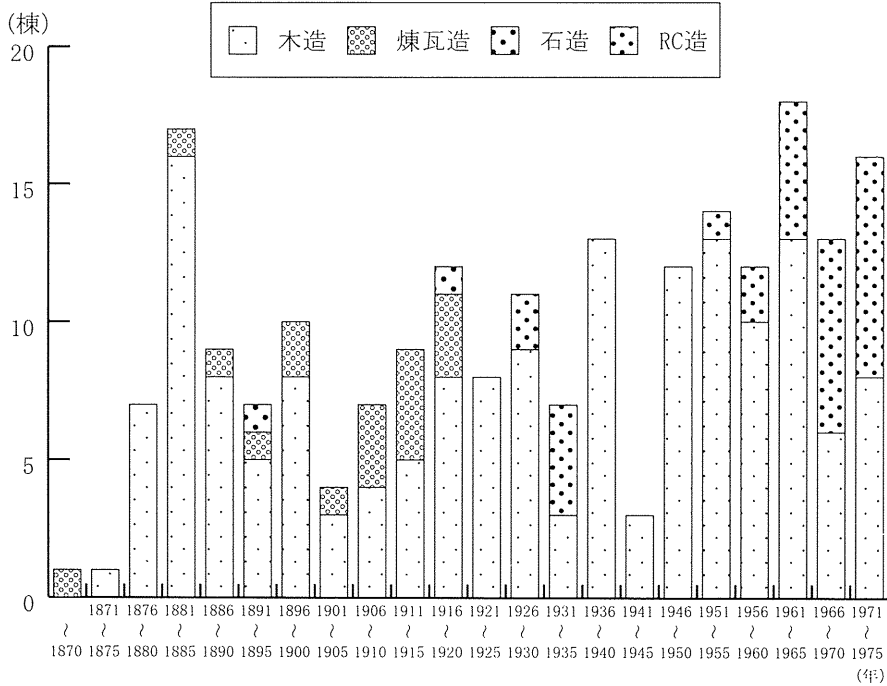


写真11 旧五輪教会の内部 (2004年8月撮影)
リブ・ヴォールト式の天井(写真16)である。港に面しているため潮風や波による老朽化が激しく現在は使用されていない。隣接して教会堂が建てられている。



第5図 長崎県における形態別・教会堂設立件数
(川上ほか, 1985aより作成)

鉄筋コンクリート造（以下、RC造）は、1929～31年の3年間に6棟が建設されたものの、その後第2次世界大戦下における鉄材などの資材不足を受けしばらく途絶していたが、戦後の1950年代以降の教会堂では一般的な建築材料となり、1966年以降には木造建築を凌駕するに至った（第5図）。ただし第2次世界大戦前期と後期では、同じRC造でもその建築形態は全く異なり、前者が木造および煉瓦造教会堂の形態を踏襲しているのに対して（写真12）、後者は機能的な造形を有している。

2) 鉄川与助と教会堂建築

長崎県をはじめ九州地方の教会堂建築に多大な貢献をした鉄川与助は、1879（明治12）年に上五島で大工の棟梁の家系に生まれ、1976（昭和51）年に97歳で没するまで、九州各地で教会建築や学校、寺院、事業所など多くの建築作品を手がけた。生涯仏教徒であった鉄川与助は、教会建築に関する技術習得において外国人宣教師たちから大きな影響を受けた。フランス人宣教師のペルー神父から明治30年代に曾根教会や鯛ノ浦教会（写真13）、堂崎天主堂（写真14）などの建設にあたり設計指導を受けている（川上、2000：176－185）。その他にも出津教会（写真15）を建設したド・ロ神父、旧浦上教会を建設したフレノ神父、黒島教会（写真5）を設計したマルマン神父などの影響を受け、独創的な建築作品を作り出した。鉄川による教会堂は、強固なイギリス積の組積法による煉瓦造の建築に特徴があるが、木造造（冷水教会）や石造（頭ヶ島教会、写真8、9）の建築も手がけた。

教会堂建築の審美性はその厳粛な外観にとどまらず、コウモリが羽を広げた形からコウモリ天井と呼ばれるリブ・ヴォールト天井（写真11、16）やステンドグラスを取り入れた厳かな内部空間にも表現されている。教会堂建築の内部は、そこで祈りを捧げる信仰者にとって聖なる空間となるだけでなく、信仰をもたない一般の観光客・訪問者にとっても敬虔な気持ちを引き起こす力を感じることができる。



写真12 RC型教会堂（前期）の事例：浜脇教会（2004年8月撮影）

五島で最初の鉄筋コンクリート作り教会。木造時代の外観を残している。1931年に建造された。

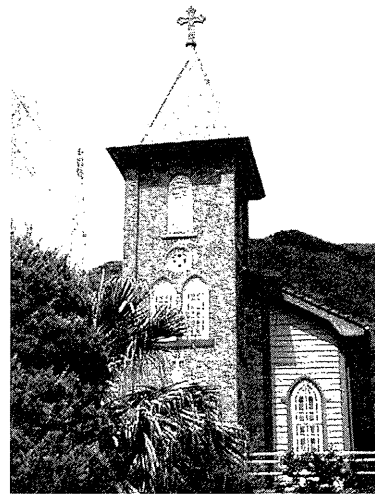


写真13 鯛ノ浦教会（2004年8月撮影）



写真14 堂崎天主堂（2004年8月撮影）
1974年に県指定の重要文化財に指定された。現在この建物は資料館として利用されている。

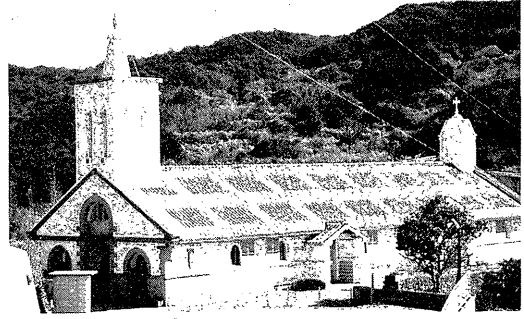


写真15 出津教会（2006年2月撮影）
ド・ロ神父は1879年出津・黒崎地区の主任司祭として赴任すると、その後の生涯をこの地における布教と貧民救済活動に捧げたとされる。遠藤周作の『沈黙』で知られる外海地区は大村藩におけるキリシタンの拠点であった。周辺にはド・ロ神父がつくったイワシ網工場跡なども復元され、神父の記念館や歴史民俗資料館も建てられている。



写真16 リブ・ヴォールト式の天井（2004年7月撮影）
コウモリが羽を広げたような形から、コウモリ天井とも呼ばれる。煉瓦造の教会堂に多くみられる。写真は山田教会（平戸市生月地区）。外壁は煉瓦造であるが内部は木造である。

以上本章では、長崎県におけるカトリック信仰の歴史的側面と現在の分布および教会堂の建築物に焦点をあて、その特徴を検討してきた。その結果、長崎の教会がもつ殉教と復活という歴史的背景に加えて、教会堂のもつ建築的な審美性と教会周辺の立地環境の調和性などさまざまな要素が折り重なって、長崎の教会群が人を惹きつける魅力となっているものと筆者は考える。こうした人を惹きつける長崎の教会は宗教施設であると同時に、地元の自治体にとって、重要な観光資源として認識されるようになっている。

Ⅲ ホストの側の観光戦略

カトリックの教会群やこれらの教会を支えるキリシタン文化が観光資源として対象化される要因は何であろうか。本章では、長崎の教会群を観光商品化する主体の一つとして、ホスト側の地域社会における観光動態の検討を通し、キリシタンが観光資源として照射される地域的背景を探る。

Ⅲ－１ 九州観光の課題

長崎県の位置する九州地方は国土の最南西部に位置し、首都圏や近畿圏といった日本の核心地域からは隔絶された外縁部にあたるものの、朝鮮半島やアジア大陸、南方諸島と近接し、外来文化の流入に優位な場所であった（青野・尾留川，1979：3－4）。こうした歴史的・文化的な独自性に加えて、温暖な気候と火山や島嶼といった変化に富んだ地形がいまって、九州地方には数多くの有力な観光地域が形成されてきた。その一方で、近年の九州観光の動向をみると、九州地域の観光は相対的に低下していることが指摘されている（九州観光推進機構，2005：10）。

例えば沖縄や北海道といった他の国内観光地と比較したとき、宿泊観光客の推移をみると、1995年を100にした指数で沖縄が147、北海道が106であるのに対して、九州は95と減少している（2002年）。この低落傾向は現在も進行中であり、九州新幹線の部分開業や九州国立博物館など観光インフラが整備されている効果がでていたとは言い難い状況にある。九州経済白書に示された首都圏女性の九州観光に対するイメージをみると、「TVや雑誌でよく見る」「全体的なイメージが良い」「今後、宿泊旅行に行ってみたい」などの項目で、北海道や沖縄に大きく遅れをとっていることがわかる⁷⁾。首都圏でのマスメディアを通じた露出が少なく、地域の観光イメージが定着されない結果、旅行需要が喚起されていないと考えられる。こうした観光地域イメージの弱さは、国土交通省が2003年に実施した東アジアの4地域（韓国，台湾，香港，中国）で日本での訪問希望地に関する調査にも、北海道，東京，大阪と比較して九州は低位であることが示されている。

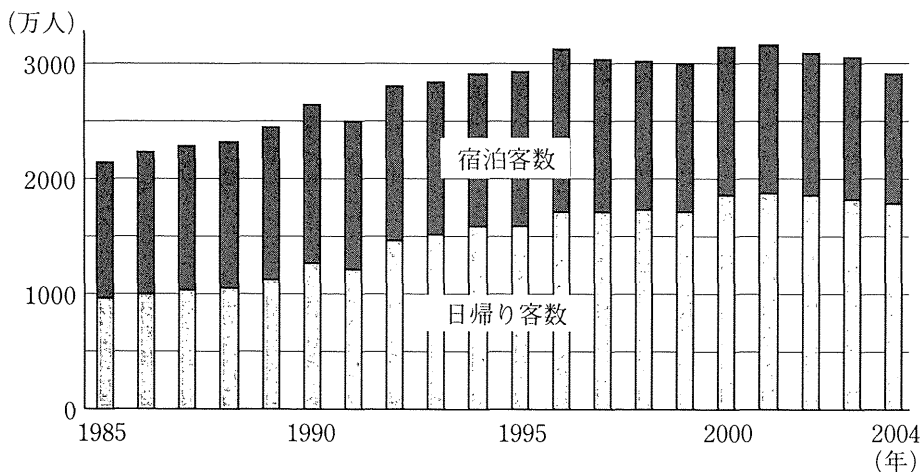
九州の場合、東アジアとの地理的な近接性が高く優位な位置にあるにもかかわらず、観光の目的地としての認知度が低いことから、九州地方が一体となって観光戦略を築く必要性が提起されてきた。2003年10月には、官民一体となった「九州地域戦略会議」が設立され、「九州観光戦略」が2004年10月に策定された。この九州観光戦略を具現化する実行組織として、2005年4月に「九州観光推進機構」が設立され今日に至っている。九州観光推進機構によると九州観光の課題は、1）九州に行きたくなくなるようなイメージが希薄、2）海外や首都圏からの訪問希望地として低位、3）観光ニーズに応える受け皿づくりの遅れ、4）九州観光の一体的な施策推進体制が脆弱、であるという。こうした課題を踏まえて、九州各地での観光地づくりと国内外から九州に観光客を呼び込む戦略が練られ、民間事業者や各種観光団体、地方自治体、国、大学、研究機関、地域住民などが連携した観光戦略が模索されている。わけても温泉や風致、食、歴史・文化などといった地域資源を活用した観光振興が急務である。

Ⅲ－２ 低迷する長崎県の観光動態

第6図は1985年以降における長崎県の観光入込客数の推移を宿泊客と日帰り客に分けて示したものである。長崎県の観光入込客は1976年に年間2,000万人を越えると、おおむね順調に増加し1996年には初めて3,000万人を突破した。しかしながらその後観光入込客数は伸び悩んでおり、2000年以降は減少に転じて、2004年には2,913万人と3,000万人の大台を割り込む結果を示している。このように長崎県における観光客は中長期的にみると微増傾向にあるが、近年では頭打ちの傾向を示していることがわかる。さらにその内訳をみると観光行動の日帰り化が進み、宿泊観光者が減少している点に、観光業界の悩みがある。

日帰り客の場合1986年に1,000万人を突破すると、その後もほぼ一貫して増加傾向にあり、2001年に最多の1,872万人の日帰り観光客があった。他方で宿泊客の場合、過去20年間ほぼ横ばい状況にあることがわかる。1985年に1,184万人であった宿泊観光客は、1996年に最多の1,418万人を記録するが、その後低迷し、2004年の統計では1,134万人にとどまっている。こうした日帰り化を反映して、観光消費額も低迷しており（第7図）、3,027億円の消費があった1996年をピークにして消費額は低迷し、2004年は2,535億円と1992年の水準以下にとどまっている。日帰り客・宿泊客別の観光消費額を比較すると、両者とも長期低落傾向にあり、長崎県の観光収入に影響を与えていることがうかがえる。ちなみに1人1日あたりの平均消費額の変化をみると、1990年には日帰り客5,333円、宿泊客15,826円であったが、観光消費額が過去最多であった1996年には日帰り客6,679円、宿泊客19,345円に達し、観光客数が多かったのみならず、1人あたりの消費も多額であったことがわかる。しかし2004年では、日帰り客が6,060円、宿泊客が18,401円であり、いわゆる「財布の紐が厳しく」なっている状況にある。

こうした観光の低迷に拍車をかけているのが、修学旅行の「長崎離れ」である。長崎県は風光明媚であること、雲仙普賢岳の噴火（1990年）の震災を受け、火山学習が可能であるといった自然条件に

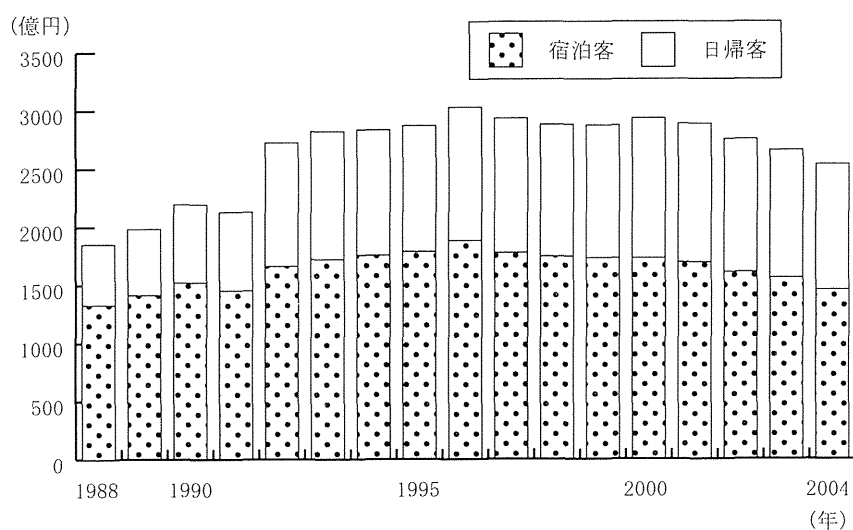


第6図 長崎県における観光入込客の推移
(長崎県観光統計より作成)

加えて、江戸時代には海外への唯一の窓口として機能した貿易港であり、その結果中国やオランダの文化が都市に息づいていることや原爆投下を受けた都市として平和学習の格好の教材を提供しうることなどから、九州のみならず西日本の府県から多くの中高生の修学旅行先として選択されてきた。社会科（地歴科）や理科学習テーマの宝庫であり、修学旅行生は長崎県観光にとって重要な顧客であった。1989年には長崎県全体で、94万7千人の修学旅行客数があった⁸⁾。しかし近年では急激に減少しており、2001年に66万2千人であった修学旅行客数は、2002年には55万5千人となり2004年では43万9千人にまで落ち込み、この15年で半分以下になっている。

修学旅行客減少の理由は明確ではないものの、複数の要因を推測することが可能である。第1に修学旅行客の分散である。長崎において重要な学習テーマである平和学習を取り上げても、世界文化遺産に登録された「原爆ドーム」をもつ広島はもちろんのこと、「平和の礎」をはじめ戦跡記念公園の整備を進める沖縄県などとの競合が激しくなり、修学旅行客が分散するようになったことが指摘される。特に私立学校の場合、学校の個性化という点から中国や韓国など海外で修学旅行を実施する学校も増加しており、修学旅行地としての長崎の地位の低下は今後も進む可能性が高い。第2に学校5日制の定着やゆとり教育による授業時間数の減少に伴う学力低下が社会問題化されるようになり、修学旅行が徐々に廃止される傾向にある点である。修学旅行客の場合、宿泊施設の収容定員に近い生徒を1部屋に宿泊させることが可能であるため、客単価は低くても部屋あたりの収益は大きく、観光業界の立場からすると団体客特に修学旅行客の減少は、観光入込客数の減少以上に経済に与える影響が大きい。

このように近年における長崎県の観光動態を概括すると、観光入込客数の低迷に加えて、1人あたりの観光消費額も低下し、加えて修学旅行に代表されるマストツーリズム的な観光が衰退するといった深刻な状況にあり、長崎県の観光は岐路に立っていると見える。



第7図 長崎県における観光消費額の推移
(長崎県観光統計より作成)

長崎県側でもこうした観光動向に対して、ただ手をこまねている訳ではない。修学旅行客の取り込みという点では、長崎県観光連盟が主体となり「ながさき修学旅行ナビ」というホームページを開設している（資料1）。ここでは長崎における修学旅行のテーマ説明や学習目的に応じたモデルコースの設定、見学施設の紹介はもちろんのこと、教育用教材の配付申し込みもweb上で可能となっている。試みに「長崎とキリスト教」という項目をクリックすると、長崎県におけるキリスト教伝来からかくれキリシタン、信仰の復活と自由といったテーマが紹介され、最後に大浦天主堂や日本26聖人記念館、原城跡など県内にあるキリスト教とのかかわりが学べる主要な施設が紹介されている（資料2）。こうしたインターネットを利用した修学旅行実施校への情報提供は長野県や鳥根県等でも行われているが、長崎県の試みは先進的なものである。

長崎県が実施した観光動向調査によれば、長崎県を訪れる観光客の動向として以下のような特徴が挙げられる（長崎県地域振興部観光課，2002）。年齢層をみると、宿泊客では「40歳代」（23.1%）、日帰り客では「30歳代」（29.1%）が最多であるが、近年徐々に50代、60代以上の中高齢者の割合が増加している。観光客の発地をみると、宿泊客では九州7県からの観光客が全体の52.3%を占めており、なかでも福岡県が25.3%と最多である。日帰り客では、長崎県内からが56.0%と過半を占めるが、その割合は前回調査（1995年）と比較して10ポイント以上低下し、代わりに福岡県からが18.1%（前回13.3%）とその比率を高めている。旅行目的としては、「自然風景をみる」が49.2%（同49.7%）、「保養・休養」41.7%（同35.8%）、「温泉浴」37.7%（同30.1%）が三大目的であり、以下僅

資料1 長崎県観光連盟による修学旅行ナビ（2006年）
（http://www.ngs-kenkanren.com/syuryo/より引用）

ながさき 感動に出会える、 学ぶチカラを育む。 修学旅行ナビ

長崎の歴史

長崎の文化

長崎の観光

長崎の教育

長崎の産業

長崎の自然

長崎の交通

長崎の生活

[トップへもどる](#)

長崎の歴史
長崎の文化
長崎の観光
長崎の教育
長崎の産業
長崎の自然
長崎の交通
長崎の生活

1549年(天文18年)、一人の宣教師によって伝えられたキリスト教。それは、長崎をキリスト教のまちとして発展させたと同時に、その時代状況のなかで厳しい弾圧を余儀なくされたものでもありました。今もあちこちに残るのキリシタン文化の面影をたどってみましょう。

1.伝来と布教

未知の国・ヨーロッパへ出た布教活動
イエズス会の宣教師、フランシスコ・ザビエルは最初に渡来した鹿児島から、翌年の1550(天文18年)に平戸へと移り、積極的布教を続けました。当時の平戸領主松浦隆信は、ポルトガル留滞に関心をもちザビエルの活動を保護。言葉の壁を越えて、17月あまりの滞在で約100名が洗礼を受けました。
「キリシタン」教と呼ばれたキリスト教はその後、西彼杵郡、島原、五島で布教が行われ、着実に信徒を増やして行きました。
日本にも従来の思想・宗教があったにもかかわらず広がりをみせた理由には、宣教師が社会事業や医療活動などにも熱心に努めたこともありました。

2.苦しみの時代へ

毎月名からの日月にキリスト教禁目
しかし、1587(天文16年)秀吉はキリシタン禁令を發布し、宣教師を追放、教会を破壊し始めます。背景には、キリシタン大名の戦士・仏間の破壊が秀吉の威神奉仕(せいじんすぶつ)と対立したこと、キリシタンの増加で一向一揆のような争いが懸念されたことなどが挙げられます。
そんななか、領土の野心的のために宣教師を派遣して信徒を増やしているとして、26名もの宣教師や信徒が十字架にかけられ処刑された、この事件も起きました。
この禁教令は南蛮貿易を奨励していたため、幕府は不徹底で、キリスト教はおおびかりを見せ、17世紀初頭には、教令は順に厳格まで広がっていたのです。これに不安を感じた豊川藤右衛門は1612(慶長17年)キリシタン禁令を發布、キリシタン受難の時代が訪れたのです。

3.かくれキリシタン

キリスト教は隠れ信仰を控へよ
幕府のキリシタン弾圧は厳重な程の、潜伏した宣教師や信徒は次々に捕えられ、改宗(当時「ころぶ」といいました)しなければ処刑され、キリシタン弾圧のために「隠れ」も考案されました。
しかし、キリシタンたちは食器に十字架の絵柄を隠したり、背面に十字架が刻まれた頼音像を挿入して信仰を守り続けていたのです。そこには信仰への確信と、信徒たちの強い帰郷力があり、また十字架やマリア像を介しての伝達もありました。



原城跡



26聖人殉教地

4.マリア像との再会

屈することなく信じていた信仰
1853(安政(あんせい)5年)鎖国が終われ、再び外国人たちが日本に渡ってきました。長崎にもまた教会が建てられ、フランス語とも呼ばれる現在の大浦天主堂が完成しました。このとき、浦上村の住人が「マリア像はどこにありますか」と訪れたため、神父はいへん、隠したといえます。キリシタンたちが信仰を守り続けていた時間は、禁令からおよそ250年という気が遠くなるような長い年月だったのです。



大浦天主堂(国宝)



日本の聖母像

5.信仰の自由

キリスト教解禁自由信仰の時代へ
1873(明治(めいし)6年)ついに禁制が解かれ、弾圧と迫害は終わりました。人々は総論の頂上としてレンガ造りの壮麗な大教会を完成させました。これが浦上天主堂です(原爆で破壊されたため再建)。

永い受難の時代を乗り越えて、自らの「自由」を守った人々の思いが、今でもまちのあちこちで感じる事ができます。



浦上天主堂

資料2 修学旅行ガイドの例(長崎のキリスト教)(2006年)

(<http://www.ngs-kenkanren.com/syuryo/christianity/index.html> より引用)

差で「名所旧跡をみる」34.0%（同40.8%）、「都市見物」27.4%（同21.8%）、「名物料理などの飲食」23.8%（同21.2%）、「遊園地・テーマパーク」23.5%（同31.8%）が続いている。

県外観光客における長崎県への来訪目的は発地や世代、性によって差異がみられる。首都圏や近畿圏を発地とする観光客の場合、「名所旧跡をみる」がそれぞれ46.6%、45.4%と最多であるのに対して、名古屋地区では「遊園地・テーマパーク」の比率が46.0%と高く、近隣の福岡地区からの観光客は「温泉浴」40.1%が卓越している。このような観光目的の発地による地域差は、観光マーケティングを行う際の重要な示唆となる。性別にみると、男性では「名所旧跡をみる」40.3%、「自然風景をみる」36.1%が主要目的であるのに対して、女性では「遊園地・テーマパーク」が40.9%と高い支持をうけている。女性からはハウステンボス（佐世保市）に人気が集まっていることがわかる。年齢別にみると、30歳代以下の若年層ではファミリーを中心に「遊園地・テーマパーク」、40歳代と60歳以上では「名所旧跡」、50歳代と60歳以上では「自然風景」が最も多くなっている。

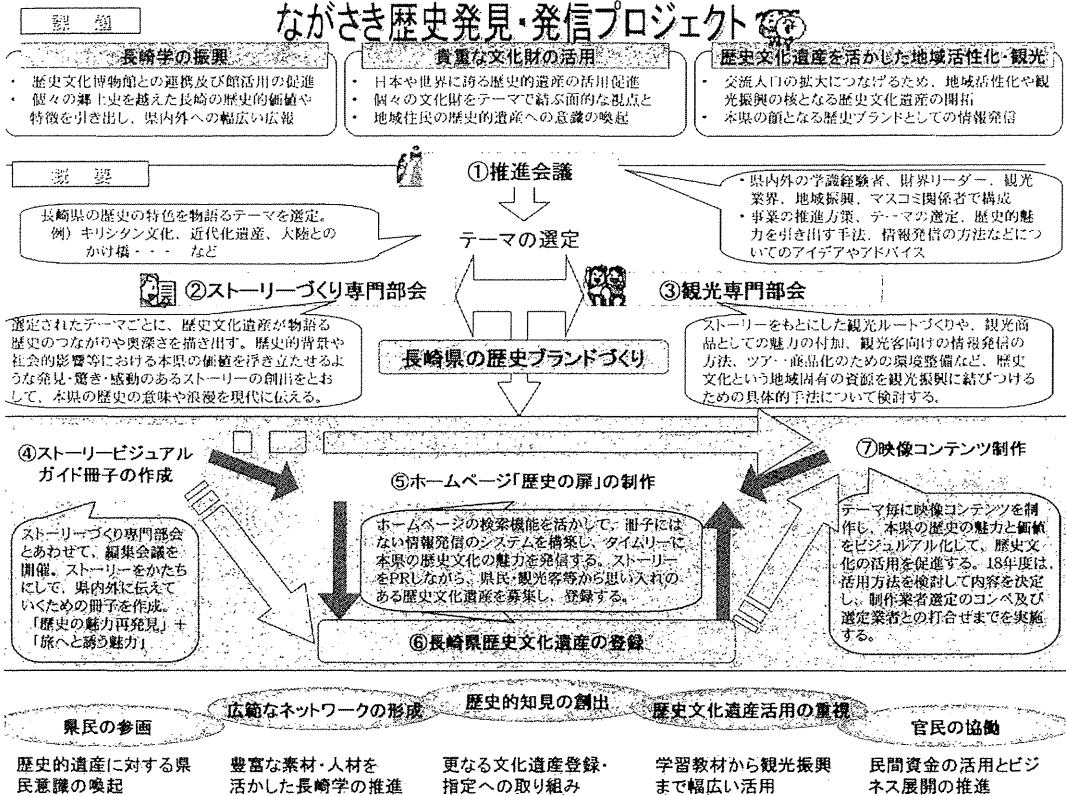
このような観光動向を踏まえて長崎県としては、観光地としての魅力を高める取り組みの強化を進めている（長崎県地域振興部観光課、2002）。近年の観光入込客の停滞として、ハウステンボスに代表されるテーマパーク型観光地に新鮮さが薄れ、他都市にも新しい観光スポットができて、観光客が他県に流れたことが一因にあり、リピーターを確保するためにも観光資源の新たな創出が必要である。また宿泊客にしめる50歳代以上の割合が増加している現在、中高齢者に焦点をあてた観光需要の掘り起こしも急務である。これらの世代では歴史・文化体験に関心が強く、温泉や食と組み合わせた観光商品を開発するとともに、適切なメディアを利用した観光プロモーションが必要とされる。こうした観光資源の創出と誘客宣伝活動にあわせて、交通アクセスなど観光インフラの整備を進めることが観光戦略上重要になると考えられる。長崎県の観光戦略の鍵は、中高年層をターゲットにした歴史・文化体験を活かした観光商品の開発にあるといえよう。

Ⅲ-3 歴史と文化を観光に：ながさき歴史発見・発信プロジェクト

長崎県は具体的にどのような取り組みを実施しているのだろうか。本節では長崎県の歴史と文化を活かした観光振興の取り組みの具体例として、2005年度に始まった「ながさき歴史発見・発信プロジェクト」を取り上げる。当プロジェクトは、長崎県長期総合計画（2001～2010年）における後期5か年計画（2006～2010年）内の重点プロジェクトの一つである「文化を活かした地域活力創出プロジェクト」における主要事業である。県内に数多く残る歴史文化遺産にストーリー性をもたせ、人々が訪れてみたいくなるような新しい魅力を創出する事業で、長崎県の教育委員会と観光課が共同して進める点に特徴がある。キリシタン文化や大陸との交流など長崎県の特徴といえる歴史テーマを選定し、「地域ストーリー」を描き出すことによって場所の魅力を高め、観光振興につなげていこうとする試みである。

資料3は当プロジェクトの概要を模式的に示したものである。県内外の有識者や財界関係者らによって組織される「推進会議」によって設定された歴史テーマに基づき、「ストーリーづくり専門部会（教育委員会）」による歴史文化遺産のストーリー創出がなされ、そこで地域的な意味づけが付与

ながさき歴史発見・発信プロジェクト



資料3 ながさき歴史発見・発信プロジェクトの概要
(長崎県教育委員会資料より引用)

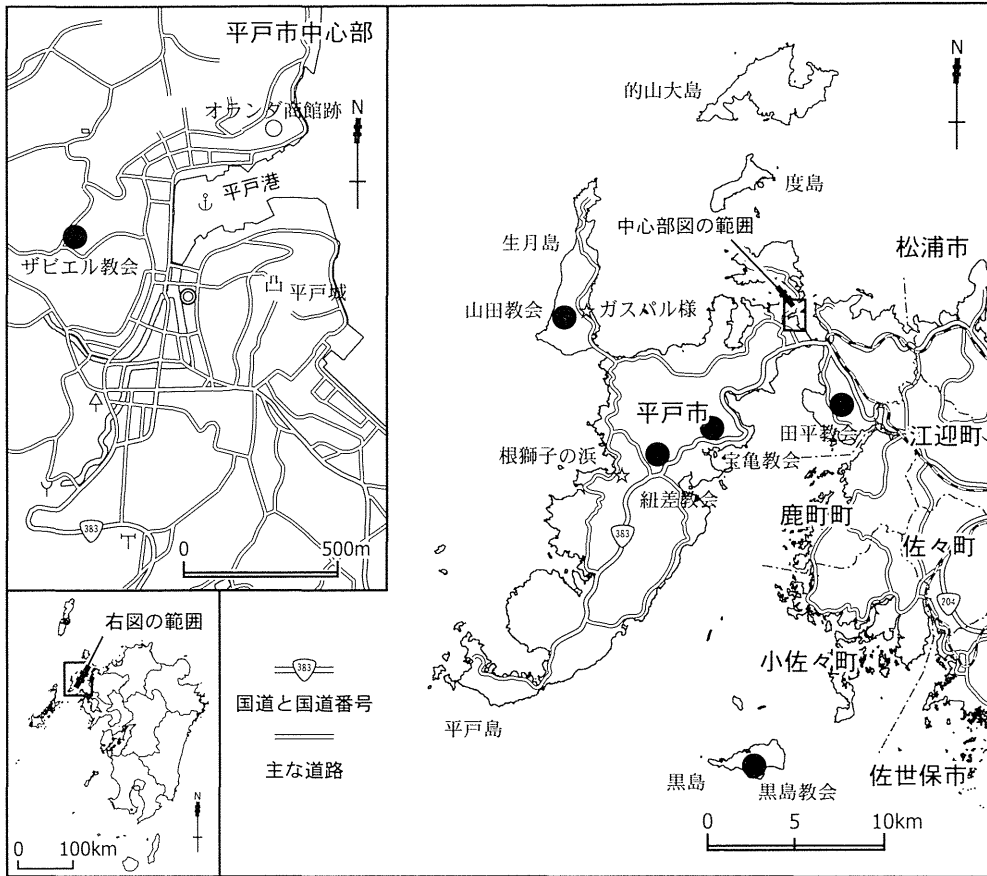
された観光ルート作成や観光商品開発など、歴史文化という地域固有の資源を観光振興と結びつける(「観光専門部会(観光課)」)ことを通して、長崎県の歴史ブランドづくりが意図されている。

当プロジェクトの試みは、歴史的な文化財(遺産)の発掘・発見や保全を担う教育委員会と、こうした歴史的な文化財を観光に活用したい県観光課とのコラボレーションであり、「長崎県歴史文化遺産」の登録制度を発足し、冊子体やホームページ、映像資料を作成して全国に発信することが目的となる。最初に取り組む歴史テーマとしては、他県にも類がなく、海外にも発信できる理由から「キリタン文化」が設定されている。

Ⅳ 観光商品としてのキリタン

Ⅳ-1 ローカル化する観光都市・平戸

平戸市の中心をなす平戸島は九州本土西北端に位置し、平戸瀬戸をはさんで九州本土とは有料の平戸大橋(1977年完成)によって結ばれている(第8図)。2005年10月1日より対岸の田平町および生月町、大島村と対等合併して現在の平戸市になった。2006年2月1日現在の平戸市の人口は39,713である。



第8図 平戸市の位置と主要施設

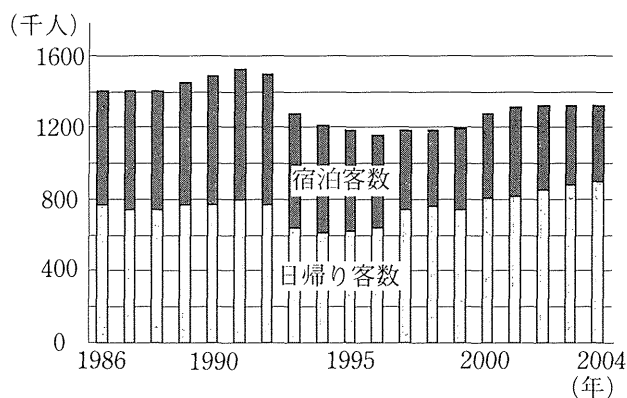
四方を海に囲まれた平戸市は西海国立公園に属し、恵まれた自然環境と豊富な史跡から観光都市としての性格をもつ。観光業のほか農業・水産業が基幹産業であり、農業ではイチゴ栽培や肉用牛が有名である。平戸牛として知られる黒毛和牛は繁殖牛、肥育牛あわせて約5,000頭が飼育され、九州地方のみならず近畿地方や関東地方にも出荷されている。また平成の大合併以前では全国一の漁港数をもつ自治体であった平戸市は近海に好漁場をもつことから、沿岸漁業基地をして栄え、イカ、イワシ、タイ、ヒラメなどの水揚げで有名である。アゴ（トビウオ）を用いた水産加工業（蒲鉾）でも知られるが、近年では、水産資源のブランド化を図り、高級魚ヒラメと地元のエビを「平戸ひらめ」「うちわえび」として売り出している。

平戸は国土の西端に位置し大陸に近いことから、古代から大陸交流の玄関口として栄え、平安時代には遣唐使の寄港地として、空海や栄西などの留学僧も平戸に立ち寄っており、大陸文化をいち早く受容できる土地であった。1550年にポルトガル船が入港すると、戦国時代から江戸時代初期にかけて平戸はわが国の海外交流の窓口として繁栄した。この時代には鉄砲をはじめとする西洋の文物の伝来やキリシタンの信仰も広まるとともに、イギリスやオランダの商館が開設され、「西の都フィランド」と称されるほど殷賑をきわめた。1641年オランダ商館が閉鎖されるまでの90年間にわたり、平

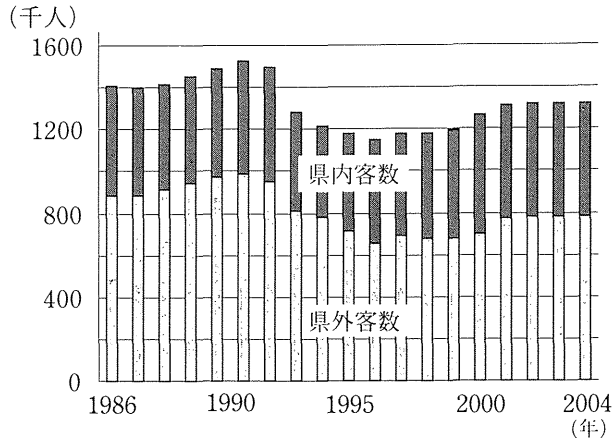
戸は日本を代表する国際貿易都市であった。江戸時代には禁教令のもと、キリシタンたちは処刑を含む厳しい弾圧化におかれたが、潜伏キリシタンとして独自のカトリックの信仰が長く保持されるとともに、禁教令廃止後にはカトリックに復帰した信徒による教会が数多く設立され、平戸のキリシタン文化を伝えている。このように平戸は、日本の社会経済史のなかで欠くことのできない重要都市であり、こうした地域の歴史文化の伝統が「大航海時代の城下町」というコピーのもとで観光資源として利用されてきた。

第9図は1986年以降における平戸市の観光入込客の推移を示したものである。1991年の153万人が最多であった。1995～9年にかけて110万人台と低迷が続いたが、2000年以降緩やかであるが、入込客は増加していることがわかる。しかしながら観光客を宿泊・日帰り別にみると、宿泊客の減少が顕著であり、ピークであった1991年の72.7万人に対して、2004年には40%以上減の42.4万人にとどまっている。他方で日帰り客は堅実に増加しており、2004年には最多となる89.7万人が日帰りで平戸を訪れた。このように入込客の総数は現状維持ないし微増傾向にあるものの、宿泊客が大幅に減少しているため、地元観光業界においては宿泊客の回復が重要な課題であり、魅力的な観光商品の開発が要請される状況にあることがわかる。観光入込客の発地を県内外別にみたのが第10図である。県外客の割合が全体の6割強を占めており、この傾向は最近20年ほどほとんど変化していない。

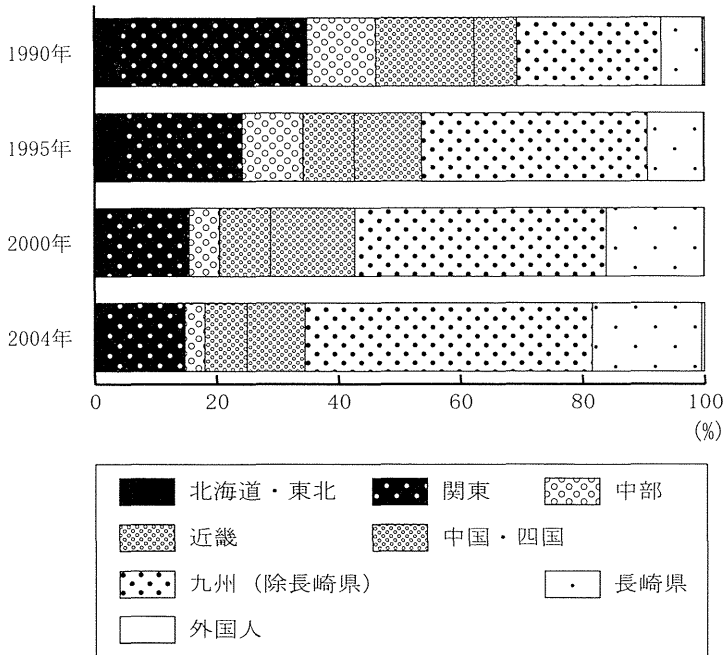
宿泊客に限定して発地の地域別割合を示したのが第11図である。長崎県内と九州地区からの観光客の割合が増加している一方で、関東地区や近畿地区からの観光客の割合が低下していることがわかる。2004年では全体の65%が九州地区（長崎県を含む）からの観光客が占めており、1990年（31%）と比較してその割合は2倍以上になっている。近距離観光客率が高くなる「ローカル観光地化」ともいべき現象の進行は、修学旅行客数の推移にも歴然と現れている（第12図）。歴史の舞台として中学・高校の歴史（日本史）の教科書には必ず記載がある平戸市は、長崎市とともに有力な修学旅行対象地であった。1989年には8万2千人の修学旅行客が平戸を来訪している。しかしながら修学旅行客数は年を経るごとに減少し、2004年では1万8千人となり、この15年間で4分の1以下にまで激減している。



第9図 平戸市における観光入込客の推移
(平戸市観光統計より作成)

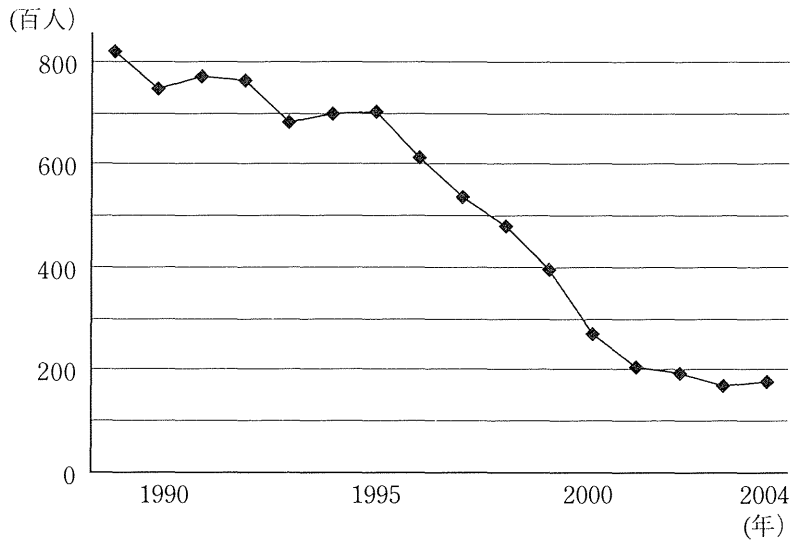


第10図 平戸市における県内外別観光客数
(平戸市観光統計より作成)

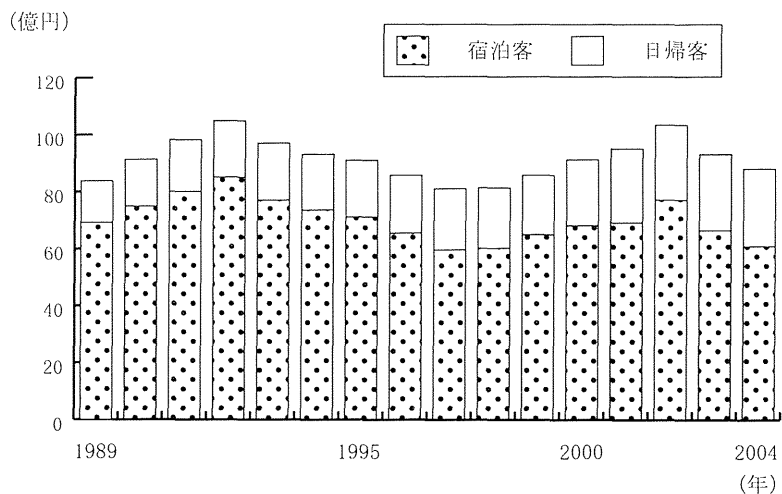


第11図 平戸市における宿泊観光者の地域別割合
(平戸市観光統計より作成)

こうした結果を反映して平戸市内における観光消費額も伸び悩んでいる（第13図）。過去最多であった1992年には全体で105億円の観光消費がなされていた。その後の減少を経て2002年に再び100億円台を回復したものの、翌年から再び減少に転じ2004年には88.2億円にとどまっている。この要因は宿泊客の減少につきるといえよう。日帰り客の増加（第9図）に呼応して、日帰り客による観光消費額は年々増加しており、2004年は過去最高の27.2億円と1989年の1.8倍に達している。一方で宿泊客による観光消費額は、宿泊者数の減少ほど低下はしていないものの、1992年には85.2億円であっ



第12図 平戸市における修学旅行客数の推移
(平戸市観光統計より作成)



第13図 平戸市における観光消費額の推移
(平戸市観光統計より作成)

た観光消費額は、2004年には61.0億円と低迷している。観光が重要な基幹産業である平戸市にとって、宿泊観光客、なかでも修学旅行に代表される団体観光客の減少と観光消費額の低迷は地域経済に与える影響が大きく、宿泊観光客を増やすための新たな観光資源の創出が強く求められていることがわかる。

IV-2 新たな観光資源の創出：平戸キリシタン紀行

1) 商品開発の経緯

観光客を誘致するためには、顧客を満足させリピーターを獲得するために、絶えず観光資源のリニューアルを図っていく努力が必要である。前節で検討したように平戸市の観光動向をみると、観光集客圏が狭域化し長崎県内と福岡、佐賀両県からの近隣観光客の割合が増加し「ローカル化」が進行していること、宿泊観光客の停滞にともなう観光収入の低迷が指摘できる。こうした状況に対し、自治体や地元観光業界では、観光客の動向とニーズにあわせたより現実的な対応を模索している。観光プロモーションにおいても、近隣県からの観光客のニーズを意識して、地元の食材を活かした郷土料理と温泉浴をアピールし、50代以上の中高齢者をターゲットとした集客活動を実施している。地元の生産団体と協力して、「平戸ひらめ」や「うちわエビ」、「平戸牛」といった食ブランドを確立し、それを観光資源として平戸観光の核とする試みがなされている。ともすれば市場出荷を重視し平戸市内での消費に関心が薄かった漁協など地元経済団体を包含した「地産地消」による地域経済の活性化の意図がある。

マスツーリズムからポストマスツーリズムへという観光形態の変化や観光客のニーズの多様化を受けて、全国の観光地域はその特色を打ち出すことに腐心しているといつて過言ではない。平戸市では大都市在住の中高年女性をターゲットに「食・癒し・体験」というキーワードで観光需要の拡大を狙っている。こうした現実的な観光努力の成果もあり、平戸市の観光入込客は微増傾向を保っているが(第12図)、「平戸ひらめ」、「うちわエビ」、「平戸牛」といった食ブランドや、癒しの重要コンテンツである「平戸温泉」は全国的なあるいは国際的な競争力をもった強力ブランドとは言いがたく、福岡をはじめとする近隣の観光客にはアピールできても、首都圏、近畿圏など遠方からの観光客を平戸に呼び込む観光資源にはなりにくいのが実情である。遠隔地域からの長崎県を含む2～3泊程度の団体旅行のコースをみると、福岡空港をゲートとして福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県などの北部～中部九州地域を周遊するのが通例であり、長崎県内で2泊以上する例は非常に少ない(長崎県地域振興部観光課, 2002)。Ⅲ章1節で述べたように、観光地間競争の激しい現代は九州地方全体で観光客の誘致に取り組む時代である。九州地方の各県・各市町村としては、首都圏や近畿圏などからまず九州への来訪を促進し、九州に来た際にはそのうち1泊でも自県・自市町村へと呼び込むことが観光戦略の課題となる。

2) 「平戸キリシタン紀行」の商品化過程

広域から観光客を誘引するためには、それだけ魅力的な観光資源が必要である。首都圏や近畿圏からの観光客を惹きつけることができる平戸の観光資源は何か。平戸が誇ることのできるオンリーワンの観光資源は何か。全国に売り出せるメジャーな観光資源は何か。そこで生み出されたのが「平戸キリシタン紀行」(以下キリシタン紀行)である。

キリシタン紀行は、毎週土・日曜日に催行されるツアー企画旅行である(資料4)。最小催行人員は10名であり、マイクロバス1台で島内の主要なキリシタンゆかりの場所をめぐる。3コースが設定されており、半日日帰りコースが2つ(平戸コース、生月コース)、1泊2日コース(田平コース)

が1つである。いずれもウェルカムガイドと呼ばれるボランティアガイドによる案内付きであり、参加費用は日帰りコースが3,000円、1泊2日コースが7,000円（宿泊費別）である。平戸コースは9:00出発で所要時間3時間30分のコースである。聖フランシスコ・ザビエル記念聖堂（平戸教会、写真17）と平戸市中心部の寺院と教会がみえるエリアを散策した後、バスにのり、紐差教会（写真18, 19）、平戸切支丹資料館、カクレキリシタンの聖地・根獅子（写真20, 21）、宝亀教会（写真22）、をめぐる。切支丹資料館では、カクレキリシタンの末裔にあたる根獅子集落の子どもたちによる殉教紙芝居が行われる。生月コースは平戸コースの帰還後13:00に出発する。所要時間は同じである。バスで出発し生月大橋を渡ると、生月町博物館「島の館」でカクレキリシタンや捕鯨の歴史に関する展示を見学した後、生月大魚藍観音、殉教史跡である聖地ガスパル様（写真23）、山田教会（写真16）をめぐり、平戸へと戻る。田平コースは1日目の午後に生月コース、2日目の午前中に平戸コースをまわり、午後は田平教会（写真6）と田平焼罪史跡公園をめぐるものである。車中では、ガイドによる説明のほか野外ミサのビデオ放映や平戸観光のビデオ放映がなされている。平戸市内（平戸島、生月島、田平地区）のキリシタン信仰にかかわる聖地、教会、資料館などを見学するとともに、平戸の歴史文化の理解を深めるためのガイドや体験が組み込まれ、参加者の知的好奇心にも応えることを企図している。

キリシタン紀行の商品企画の準備が本格的に始まったのは2003年の2月である。発起人には観光学を専門とする学識者や、県観光連盟新商品開発室長、平戸観光協会の理事、生月町（当時）振興公社観光コーディネーターといった長崎県や平戸市の観光関連の代表者に加えて、観光資源として対象化されるカトリック教会側の神父や信徒の代表も参加した。



資料4 平戸キリシタン紀行のパンフレット
（平戸観光協会資料より引用）

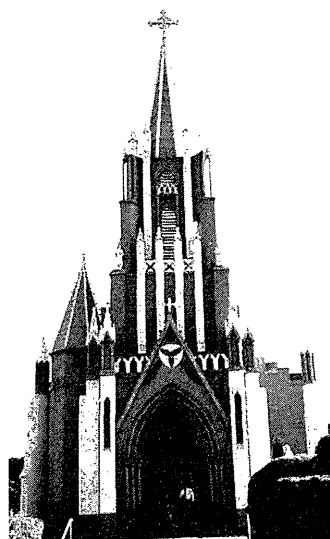


写真17 平戸ザビエル記念教会（2004年7月撮影）
平戸観光の代表であり、多くの巡礼者や観光客で年間を通してにぎわう。1971年にザビエルの平戸訪問の記念像が建立され、この名称となった。



写真18 紐差教会（2004年7月撮影）
原爆により旧浦上天主堂が破壊された後は、日本最大の天主堂として知られた。アーチ型の天井が美しいロマネスク様式の教会である。



写真19 紐差教会の内部（2004年7月撮影）
高い空間に折上天井の形式をとる。ステンドグラスも美しい。

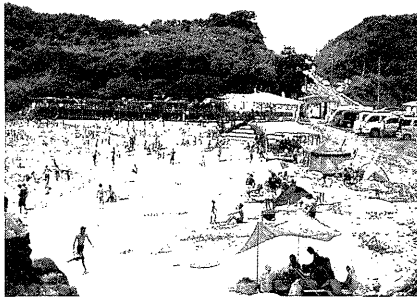


写真20 聖地・根獅子の浜（2005年7月撮影）
根獅子の集落では近年までカクレキリシタンの信仰が存続していたが、現在では途絶してしまっている。浜に隣接した集落内に切支丹記念館が建てられている。夏は海水浴でにぎわう。

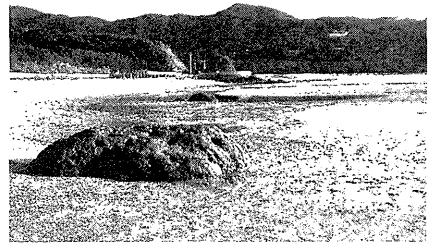


写真21 昇天石（2005年7月撮影）
根獅子の浜の波打ち際にある写真中央の石は昇天石と呼ばれ、ここで処刑された根獅子のキリシタンが昇天したと伝えられる聖なる石である。潮が満ちてくると海中に没する（写真20）。

商品企画の会合（正式名称：平戸キリシタン紀行推進協議会）は準備会とあわせて、2003年2月7日から7月7日にかけて12回開催された。この協議会において、商品名やコース設定に関する意見交換、見学対象となる教会や司祭会など関係機関への折衝・協力依頼、宣伝用パンフレットの作成・配布などキリシタン紀行の催行にかかわる企画・運営が決定された。キリシタン紀行のツアー観光客がまわるカトリック教会は、歴史的な文化遺産であると同時に信徒によって実際の祈りの場とされる宗教施設である。したがって意見交換の場では、観光客にマナーを徹底させることや根獅子集落における殉教の歴史、カトリックの祭礼に係わる理解を深めてもらうことが要請された。ただ観光客を受け入れることに否定的な教会はなく、歴史や信仰に知識のある同行者（ガイド）が随行するならば、教会所有の資料館（紐差教会）を開放することや参加者が神父や信徒の話聞かせてもらう場を設けることも検討された。教会側からは同時に「新商品」というような言葉に対する忌避も寄せられた。

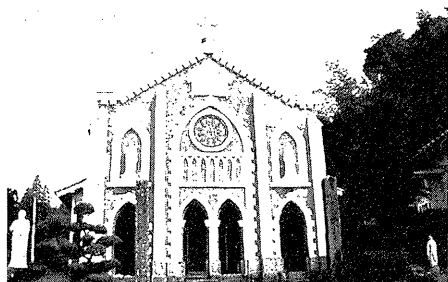


写真22 宝亀教会（2005年7月撮影）

宝亀地区は外海地区から移住した潜伏キリシタンの子孫が多く、1898年頃建てられた古い教会堂である。聖堂は木造瓦葺で外壁には板張りがなされているが、正面の玄関部分の一部は煉瓦造である。



写真23 聖地・ガスバル様（2005年7月撮影）

生月島を治めていたキリシタン領主の籠手田氏と一部氏が去った後、島の信徒を指導した西玄可（洗礼名ガスバル）が1609年に処刑された場所として聖地となり、カトリック信徒による記念碑が建てられている。江戸時代生月島は多くの殉教者を出し、潜伏キリシタンの時代がおわりカトリックへの復帰が可能になった時代においても、カクレキリシタンとしての信仰を堅持する人が多かった。

キリシタン紀行のコンセプトは、1550年フランシスコ・ザビエルの伝道により始まった平戸キリシタンの苦難に富んだ歴史を物語化して、観光客にユニークな歴史文化体験を提供することにあるといえよう。単なる名所旧跡巡りに終わらないように地域史に通じたボランティアガイドが案内する。切支丹資料館では、殉教者の末裔にあたる子どもたちによる紙芝居の上演がなされ、キリシタン弾圧とその後のカクレキリシタンの歴史を体感した上で、参加者は殉教者の血でそまった根獅子の浜を案内されることになる。

キリシタン紀行の商品化の重要な担い手である平戸観光協会は地元の有力ホテルの経営者も理事を務めている。したがってキリシタン紀行には、平戸への観光客増加による経済的な期待が込められている。パンフレット中には、平戸城や松浦家の史料館などキリシタン以外の歴史文化遺産の紹介や平戸温泉、平戸の食材などの観光情報も盛り込まれている。キリシタン紀行を契機として平戸を訪れた観光客に対して平戸の魅力をアピールし、願わくばリピーターに成長することが期待されているのである。

V キリシタンツアーの与えるもの—おわりにかえて

本稿では、宗教的な聖地が地方自治体による観光資源化の取り組みにより、新たな観光商品として消費の対象とされている実態を長崎県平戸市における「平戸キリシタン紀行」を事例に検討してきた。最後にキリシタン紀行の実績と観光商品としてのグローバル化の状況について概括し、聖地が観光商品化される意味を考えてみたい。

第2表は2003年と2004年におけるキリシタン紀行の催行実績を示したものである。キリシタン紀行は2003年5月24日から6月8日にかけて4回、計200名によるモニタリングを経て実施された。パンフレットの完成が7月16日のことであり、かなり急ピッチで商品開発と施行がなされたことがうかがえる。初の催行が同年8月17日であり、2003年には平戸コースが8回の133人、生月コースが1回の12人の参加がみられた。2004年の場合、平戸コースが11回の140人、生月コースが6回の107人であった。この数値でみる限りにおいて、キリシタン紀行が観光商品として成功、もしくは定着していると判断することは難しい。土日限定のツアーであるが、年間の催行回数が12回（2004年）にとどまり、参加者も両年あわせて392名に過ぎない。

キリシタン紀行の催行実績が伸びない要因として、その催行形態にあると考えられる。最小催行人員は一部例外はあるものの10人であり、しかも参加申し込みの締め切りが出発の1週間前となっている。これはマイクロバスを借り上げる必要があるためであるが、参加希望者がいても最少催行人員に到達することが容易ではない。団体客の場合、最初からバスで平戸に来訪するので、わざわざ現地

でのツアーパックに申し込む必要性に乏しく、ウェルカムガイドを予約するだけで、ガイドにキリシタンのことも含めた説明を受けることが一般的である。個人客では特に日帰り客の場合、旅程を1週間前に決定していないことが多く、実際に平戸に来訪し、観光案内所等でキリシタン紀行のパンフレットをみて興味を持つことが一般的であり、情報を入手した時点で申し込むことができないキリシタン紀行のツアーへの参加は困難が大きいといえる。実際に申し込みがあったものの最少催行人員に到達せずキャンセルになったツアーは両年の合計で166件の605人に上っており、この数値は催行実績を大きく上回る結果となっている。そこで主催者の平戸観光協会では、2004年から少人数を対象としたタクシー利用のツアーを実施している。タクシーを利用する場合、事前の予約も必要がなく少人数で対応できるので利便性は高いものの、その分価格にも反映されるので、利用実績は5件（15名）にとどまっている。ただし2005年以降はバスによるツアーは催行されておらず、すべてタクシーによる対応となっている。参加者

第2表 平戸キリシタン紀行の催行実績

年	月日	コース	人数	
2003年	8月17日	平戸	17	
	8月22日	平戸	15	
	9月16日	平戸	15	
	11月2日	平戸	11	
	11月9日	平戸	12	
	11月29日	生月	12	
	11月30日	平戸	22	
	12月5日	平戸	11	
	12月6日	生月	24	
	12月7日	平戸	6	
	2004年	1月1日	平戸	14
		2月16日	平戸	12
2月22日		生月	12	
2月23日		平戸	12	
3月28日		平戸	5	
4月3日		平戸	7	
4月4日		平戸	6	
6月13日		平戸	15	
6月27日		平戸	4	
8月31日		生月	45	
9月18日		生月	13	
9月25日		生月	15	
9月26日		平戸	15	
9月30日		生月	12	
10月28日		平戸	45	
12月10日		生月	10	
12月26日	平戸	5		

(平戸キリシタン紀行推進協議会資料より作成)

の発地を記録のあるデータからみると、遠隔地では東京都や大阪府、岡山県、島根県からの参加者があった。観光客の広域化という意味では一定の成果を挙げているともいえるが、量的な増加に直接結びついているとは言いがたいであろう。

しかしながらキリシタン紀行の観光効果が低いとはいえない。旅行代理店によるツアー企画の一部に平戸のキリシタン紀行が取り入れられ、実施されている例もみられる。A社の場合、「美しき九十九島とハウステンボス宿泊 寺院と教会が見える風景 厳かな平戸キリシタン紀行」と題したツアーを2005年12月31日から翌年1月3日にかけての3泊4日で企画した。羽田空港発着で唐津、平戸、九十九島、ハウステンボスをまわるコースであり、旅行代金は23.9万円という高額商品である。2日目に平戸を訪れ、ウェルカムガイド付きでキリシタン紀行めぐりが組み込まれている。

B社の場合には、平戸キリシタン紀行のネーミングで4プランを提供している。平戸と生月の主要な教会群をセットにしたガイド付きマイカープランや小型タクシープランを用意し、各料金も参加人数と催行日によってきめ細かく設定するなど、顧客の側に立った観光商品化を進めている。最も高額な平戸・生月小型タクシープランの場合、通常料金が1名で19,000円、2名では9,500円、3名になると6,400円となっている。こうした旅行代理店によるツアー参加者やウェルカムガイドを利用した個人客による「キリシタン巡礼」は、2004年の夏季（7～9月）には1,340人、秋冬季（10～12月）には962人あった。この数値は着実に伸びており、2005年の4～8月の5か月間では2,328人に達している。

教会めぐりの観光商品化の動きは、平戸市だけのものではない。禁教後多くの信徒たちが移住した五島では数多くの教会が建立され、祈りの島として売出しをはかっている。長崎県観光連盟も「新キリシタン紀行」というパンフレットを作成し（資料5）、「平戸・生月・田平」、「佐世保・上五島」、「五島・福江島」、「長崎市・西彼杵」、「島原・雲仙・天草」と県内を5地区にわけて、教会めぐりのモデルコースを設定している（資料6）。長崎県観光連盟では、カトリック長崎大司教区の協力を得て、教会堂建築の見所の解説パンフレットを作成し、教会めぐりを観光に積極的に取り入れていくと同時に、教会見学時の注意点を示して（資料7）、観光客に対して教会内でのマナー説明も加えている。

また教会めぐりを促進する動きはカトリック教会側からも起こっている。資料8は2005年に刊行されたカトリック長崎大司教区監修による『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』である。本書では長崎県内と天草（熊本県）にあるカトリック教会のガイドブックであるが、教会堂建築や教会をめぐるとの歴史の紹介にとどまら

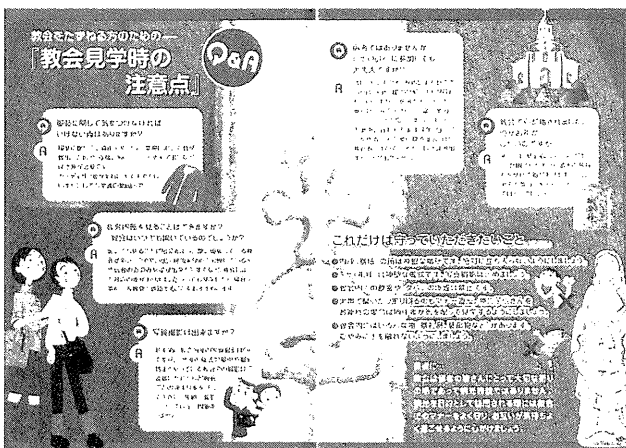
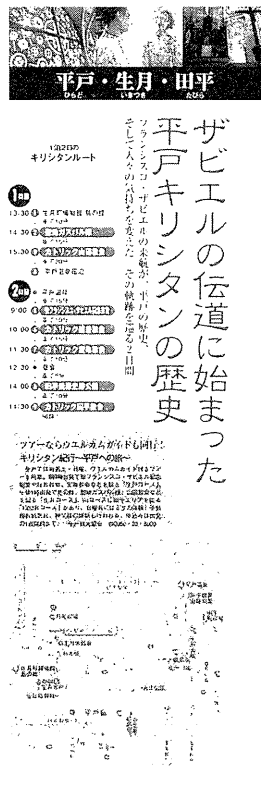


資料5 長崎・新キリシタン紀行のパンフレット
（長崎県観光連盟資料より引用）

また教会めぐりを促進する動きはカトリック教会側からも起こっている。資料8は2005年に刊行されたカトリック長崎大司教区監修による『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』である。本書では長崎県内と天草（熊本県）にあるカトリック教会のガイドブックであるが、教会堂建築や教会をめぐるとの歴史の紹介にとどまら



資料6 長崎県の新キリタン紀行パンフレットにおける平戸・生月・田平コースの説明 (長崎県観光連盟資料より引用)



資料7 教会見学時の注意点の説明 (長崎県観光連盟資料より引用)



資料8 カトリック教会による教会めぐりの巡礼地化の動き (長崎県文献社編, 2005)

ず、教会にナンバーを付し、教会めぐりの巡礼化を図っている。さらに本書後半では、殉教者を偲ぶ巡礼地ガイドとして、各地の殉教地や記念碑、墓地・墓碑、セミナリオ跡などを紹介し、聖地巡礼として紹介している。このようにカトリック教会側でも観光化に対応し、ミサや冠婚葬祭など信徒の信仰生活に影響のでない範囲で、非信徒へカトリックをアピールしていく手段の一つとして、教会群や殉教の聖地巡礼を打ち出しているといえよう。

聖地の観光地化、聖地の商品化という現象は古くからみられる現象である。聖地は社会経済的、政治的、文化的、あるいは宗教的といったさまざまな目的をもった意味ある主体の思惑によって、創造され、新しい意味を付与されるとともに、絶えずコンフリクトが繰り返されてきた。松井（2005）ではツーリズムの進展にともなう聖地管理の課題として、観光圧力により聖地の雰囲気損なわれ、信徒や聖職者の信仰生活が脅かされるだけでなく、観光客にとっての場所の魅力を喪失する事例について触れた。長崎のカトリック教会は小教区となる集落を単位とした信者の共同体に担われた聖なる空間であり、他地区との教会とは本来は独立した存在である。それが時代の変化に伴い、苦難の信仰の歴史とそのシンボルとしての美しい教会堂建築が観光資源として注目され、あたかも秩序をもった意味ある巡礼地として複数の教会や殉教地が結び付けられている現状は何を意味するのであろうか。これまでの学問が分析の視点として用いてきた、場所の商品化や真正性、場所のアイデンティティと集合的記憶などの諸概念を再考する必要があるだろう。

本稿では紙幅の都合でもあり、観光客のまなざしや教会めぐりによる観光体験に関する議論、あるいは教会が観光対象としてまなざされることに対する信徒側の反応などについて触れることができなかった。次稿ではこうした意味ある主体と聖地とのかかわりを検討する必要がある。

現地調査の際には、平戸市役所観光商工課、平戸観光協会、長崎県地域振興部観光課、長崎県教育委員会をはじめとする多くの皆様方に資料提供のご便宜をいただいた。また製図の一部は筑波大学大学院博士課程生命環境科学研究科の駒木伸比古氏および久保倫子氏のご助力を得た。また英文要旨の作成において、トンプソンリバーズ大学助教授のトム・ワルデチュク氏のお手をわずらわせた。記して厚く御礼申し上げます。本報告の取りまとめにあたり、平成16～17年度科学研究費補助金 基盤研究(B)「日本農業の担い手からみた農業維持システムの地域動態的研究」(研究代表者:田林明, 課題番号:16300291) および平成15～17年度科学研究費補助金 基盤研究(C)「『場所の聖性』の変容・再構築とツーリズムに関する総合的研究」(研究代表者:山中弘, 課題番号:15520057)、平成17年度筑波大学学内プロジェクト研究 助成研究B「聖地の観光資源化に伴う場所の再構築に関する研究」(研究代表者:松井圭介)の研究費の一部を利用した。

注

- 1) カトリックの信者数は、当年12月31日現在で小教区別の信徒籍台帳に記載されている信徒数に聖職者、修道者、神学生の数を加えたものである。カトリックの信者になるためには、宗教儀礼(洗礼)を受ける必要があるため、信者数の値は他の宗教と比較すると正確であるとされる。
- 2) カトリックでは47都道府県を16の教区に分割している。教区名と範囲(都道府県)は次の通りであ

る。札幌教区(北海道)、仙台教区(宮城県、青森県、岩手県、福島県)、新潟教区(新潟県、秋田県、山形県)、さいたま教区(埼玉県、栃木県、茨城県、群馬県)、東京教区(東京都、千葉県)、横浜教区(神奈川県、静岡県、山梨県、長野県)、名古屋教区(愛知県、岐阜県、富山県、石川県、福井県)、京都教区(京都府、三重県、滋賀県、奈良県)、大阪教区(大阪府、兵庫県、和歌山県)、広島教区(広島県、

- 山口県，島根県，鳥取県，岡山県），高松教区（愛媛県，香川県，徳島県，高知県），福岡教区（福岡県，佐賀県，熊本県），大分教区（大分県，宮崎県），長崎教区（長崎県），鹿児島教区（鹿児島県），那覇教区（沖縄県）。このうち東京，大阪，長崎の各教区は大司教により司牧されており，大司教区と呼ばれる。
- 3) 教会数とは小教区，準小教区，巡回教会，集会所の総数である。小教区とは教区司教により，小教区として認可された教会を指す。準小教区は，小教区に属し常設の聖堂を持ち，担当司祭に委任されている。巡回教会とは，小教区に属し常設の聖堂を持ち，定期的に司祭が巡回してくる教会を指す。これらに対し，聖堂を持たないものの，定期的に信者が集まり，ミサが捧げられる場所を集会所という。
- 4) 教会史に関する記述は，家近（1998），鶴沼（1992），片岡（1989），神田（2005），長崎文献社編・カトリック長崎大司教区監修（2005），宮崎（2001）を参考にした。また本稿では，禁教令のもと潜伏時代のキリシタンを潜伏キリシタン，禁教令が廃された後になってもカトリックに復帰せず，信仰を隠し

- 続けたキリシタンをカクレキリシタンと呼称する。
- 5) オラショとはラテン語のOratioに由来する祈祷を意味する言葉である。潜伏の時代に独自の展開を遂げ，カクレキリシタン独自の言葉として伝承されている。宮崎（1996）には多くの信仰事例が紹介されている。
- 6) 本節では，川上秀人ら九州大学工学部建築学研究室による一連の調査に基づく，川上・土田（1983），川上・土田・前川（1985a），川上・土田・前川（1985b），川上（2000）に依拠している。
- 7) 同上による。首都圏在住の女性373人への聞きとり調査の結果，「北海道」「沖縄」「九州」に対してイエスの回答者数が「TVや雑誌でよく見る」がそれぞれ75，53，23，「全体的なイメージが良い」が72，50，31，「今後，宿泊旅行に行ってみよう」が60，56，36であった。
- 8) 長崎県の観光統計では，修学旅行客数は各市町村への聞きとり調査から推計している。数値は長崎市の場合宿泊客と日帰り客の合計，その他の市町村では宿泊客数である。

参考文献および資料

- 青野壽郎・尾留川正平（1979）：『日本地誌 第19巻 九州地方総論・福岡県』二宮書店，3-4。
- 家近良樹（1998）：『浦上キリシタン配流事件』吉川弘文館，211p。
- 鶴沼裕子（1992）：『史料による日本キリスト教史』聖学院大学出版会，200p。
- 片岡弥吉（1989）：『長崎のキリシタン』聖母の騎士社，204p。
- 川上秀人・土田充義（1983）：長崎県を中心とした教会堂建築の発展過程について。日本建築学会論文報告集，331，155-163。
- 川上秀人・土田充義・前川道郎（1985a）：長崎県を中心とした教会堂建築の時代区分について。九州大学工学集報，58(3)，111-117。
- 川上秀人・土田充義・前川道郎（1985b）：長崎県を中心とした初期教会堂建築の特徴について。九州大学工学集報，58(3)，207-213。
- 川上秀人（2000）：長崎県の教会建築史。三沢博昭・川上秀人『三沢博昭写真集 大いなる遺産 長崎の教会』智書房，146-199。
- 神田千里（2005）：『島原の乱』中央公論新社，252p。
- 九州観光推進機構（2005）：『九州』九州観光推進機構 p.10。
- 長崎県教育委員会編（1977）：『長崎県のカトリック教会（長崎県文化財調査報告書 第29集 昭和51年度）』長崎県教育委員会，284p。
- 長崎県地域振興部観光課（2002）：『長崎県観光動向調査概要報告書』長崎県，96p。
- 長崎文献社編・カトリック長崎大司教区監修（2005）：『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』長崎文献社，148p。
- 松井圭介（2004）：聖地の風景－日本の民衆宗教の場合－。菊地俊夫編著『風景の世界－風景の見方・読み方・考え方－』二宮書店，60-70。
- 松井圭介（2005）：ツーリズムの影響にともなう聖地管理の課題－Shackley, M.: Managing sacred sitesを手がかりとして－。人文地理学研究，29，159-169。
- 宮崎賢太郎（1996）：カクレキリシタンの信仰世界。東京大学出版会，287p。
- 宮崎賢太郎（2001）：『カクレキリシタン』長崎新聞新書，295p。
- 森川嘉一郎（2003）：『趣都の誕生』幻冬舎，271p。

“Cristão” as a Tourism Strategy: A Conflict between Religion and Tourism

MATSUI Keisuke

The purpose of this study is to examine how some religious historic cultures named “Cristão” in Nagasaki prefecture become modern tourism resources, and how religious sacred places are constructed as tourist areas.

Nagasaki diocese is known as an area of Catholic diffusion, having 67 thousand Catholics which is second to that of Tokyo. Nagasaki has the highest percentage of Catholics in Japan, 4.43% of the population. Nagasaki has a long Catholic tradition. Since the time of St. Francisco Xavier, who brought Christianity to Japan, Christianity has played an important role in Nagasaki, which has a lot of significant Church buildings, including Oura Catholic Church, which is a national treasure, Tabira Church, Aosagaura Church, Kashiragashima Church and the former Gorin Church, these are all registered as important cultural properties. Also these churches have charm as tourist attractions.

What is the reason for the Catholic Church and Christian culture to become tourist attractions? I can point out the decrease of tourists in Nagasaki as one of the factors. Recently, the number of tourists to Nagasaki is decreasing, especially hotel guests, including school excursion visitors, which is quite noticeable. Therefore Nagasaki has developed sightseeing commodities including an historical experience for old and middle aged people as a tourism strategy. Hirado-City is one of the cities that has eagerly promoted Christian places for tourism. The city has produced some package tours around Christian classic sites. There are three courses, two of them are day trips, the Hirado-course and the Ikitsuki-course, and the third one is an overnight trip called the Tabira-course. On these tours, a volunteer guide accompanies the tourists on visits to some important sacred Christian places in Hirado-City. The city hopes that tour participants will become repeat visitors to Hirado.

Tourism commodification of a pilgrimage to a sacred Christian place is also performed in the Goto Islands beside Hirado-City. Not only does Nagasaki prefecture make a tourist brochure of the Christian pilgrimage, the Catholic Church also publishes a pilgrimage guidebook, and there is a movement to assume a church the pilgrimage site. Therefore, places of martyrdom monuments, graveyard, and the remains of seminaries are introduced as sacred places. Sacred places serve purposes that are socio-economic, political, cultural and the religious in nature. These purposes give meaning to the subject (person) according to his or her intentions, which gives new meaning to these sacred places.

Key words: *Cristão*, Catholic Tourism, Tourism Strategy, Nagasaki, Politics